六話

ずうっとむがしあるけどな。

あるどごによ、あばとちゃとえだっけど。あばは、おりんことという子どもなしたけど。そしてこんだ、そのわらしまだ小さい時に、あば死んだだよ。そしてこんだ、いまかが（後妻）でものもらったんだどよ。そしたば、いまかがも、一人おなごわらしなしたんだどよ。おりんこいるから、こりんことつけろがと、こりんことつけだとな。これで、おりんことこりんこの娘、二人いたんだど。

それでこんだ、ちゃ、出稼ぎに行ったんだど。したばそのあとで、こんだいまかがよ、先のあばの子どもを、めごくねんだど。こりんこばかりめごくて、おりんこめんこくねんだとよ。なんじょしたらえがべとて思案したたて、生まれてきたもの、なんともされねべエ。

だんだん暮らしてるうちに、学校さ行くことになったんだど。それでこんだ、

「こりんこ、こりんこ、あっちゃ（姉）どこさ知らせんなよ。あっちゃの弁当さ、毒まんませでやるがら、あっちゃどこさ知らせねで、お前ももらって食うなよ」

と、聞かせだんだど。したば、

「あっちゃ、あっちゃ、お前の弁当さ毒まんませでるから、そえば投げて、俺のの二人して分けて食うごと」

ど、分けで食べて、あっちゃのまんま投げだど。あばまだ家にいで、

「あれは、死んだど」

って、喜んでえだんだど。んだども、二人は元気で学校からもどって来たんだど。

「なんだもんだべ。あの毒まんま、きがねがったんだな」

ど思って、あぎらめでえだけど。んだども、なんどしてもあっちゃどこ、憎いんだと。そしてこんだ。あっちゃどこよ、なんとかさねばなんねどて、こりんこさ、

「お前どこさ、なんでもみんな買ってけるがら、あっちゃどこさ、なんだって着らせんなよ」

って、着らせだんだと。そしたば、まだまだあっちゃさみんな着らせだんだどよ。それでこんだ。箱こひゃで（作って）もらって、山さ捨てるよりほがねエど、思ったど。それでいまかが、おりんこどこ箱はひで（入れて）、山さ捨てることにしたど。ちゃいねどごで、隣のちゃどこ頼んで、夜まに投げることに決めたんだど。

したば、こりんこが、

「お前どこ山さ捨てるという話だから、俺がヌガもらってきていれるがら、それこぼしながら行げ」

って、箱の下の方さ、大っきな穴こしゃだんだど。そしてこんだな、ヌガを袋さもらってきて、おりんこ箱させられるどき、あずけたんだど。ひば、俺、後からそのヌガのあど探していくからと、二人で泣いで入れだど。

夜まになったば、隣のちゃどこ頼んで、おりんこどこ捨てに行ったごでエ。そしてこんだ、次の朝まに、こりんこがにぎりまんまこせで、ナス漬からミソ漬からせで、ボダッコもたないで、

「あっちゃ、あっちゃ」
と叫んで、山越えで、野越えで、たずねて行ったど、そしたば、どこかで、
「ほうー」
って言うんだど。
「あっちゃ」
って言えば、どこかで、
「ほうー」
って言うんだど。たねでたねでずうっと行って、
「あっちゃ」
って言えば、
「ほうー」
って言うど。どこまでも叫んで叫んで行ったば、すぐそばで、
「ほい」
ったど。ここらあたりにいだど思って、
「あっちゃ」
って叫んでやぶかましてみだば、箱あるんだど。それがらこんだ、
「あっちゃ、俺が迎いにきた」
どて、蓋あげで出して、あっちゃと二人してまんま食って、そしてくどいだど。家の方さ行けばおごられるんて、山越え、野を越えで、山のかげの村さぉりで行ったごでエ。そしてこんだ、
「なんとが、俺どこ子守りに使ってけろ」
「下女こに使ってけろ」
って願って歩いだたて、二人ふとじにだば、なんぼしたてねんだど。
「俺の家で子守りこ用だ」
「俺の家で下女こ用だ」
って言ったたて、二人ふとじでねば、出来ねと言ったど。こういうわけだから、二人ふとじに使ってけろと言ったば、二人ふとじに置いてけだ家あったど。その家で使われでえたごでエ。
そしてるうちに、家の方で、稼ぐに行ってだちゃ、帰ってきたごでエ。したば、
「わらしたち、どこさ行ったア」
ったば、
「遊び行った」
と、うそこいでいだど。さあ、一日暮らし、二日暮らしたたて、来ねべったあ。それでこんだ、
「どこさやったの」
「どごさ行ったの」
って言ったば、こんな話聞こえできたど。
隣のちゃどご頼んで箱させで投げだんだか、捨ててきたんだか、流したんだか、そういう話あるどて、聞いだべしや。そしてだんだん聞いてみたば、山さ捨てだって話聞いだど。ちゃバカみだいになって、食べるもの背負って、たねで行ったごでエ。
「おりんこ、こりんこ、声ぜせじゃ。こりんこ、おりんこ、どこさ行った」
って、山越え、野越えで行ったたってよ。音も便りねわげだア。それでも行き行きしたどこで、箱もあれば、まんま食ったあともあるんだど。

「ああ、これだば、どこかさ迷って死んだか、わる者に殺されだんだか、わからね」
どこう思って、ちゃがたいした力落どしてよ、
「おりんこ、こりんこ、どこさ行った」
って、泣いで行ったど。こんだ、だんだん行ってもいねがら、二人は死んだのだと思ったど。それがために、
「おりんこ、こりんこ、ナンマイダ。こりんこ、おりんこ、ナンマイダ」
って、山越え、野を越えで、山のかげさおりで行ったごでエ。だんだん行き行きするうちに、おが（あまりに）泣いで、めぐらになってしまったけど。それがらだんだん探がし探がしして、棒見つけで、棒ついで、
「おりんこ、こりんこ、ナンマイダ。こりんこ、おりんこ、ナンマイダ」
って行って、その村さおりだごでエ。そして、まなぐも見えねんだし、休んでだんだど。そしてな、
「おりんこ、こりんこ、ナンマイダ」
ばかり言っていだど。したば、
「せば、お前のは、なんのまじないだべ」
と聞かれだど。それで、こういうわけだと言ったごでエ。
「せば、わらしたち、どこさ行ったのだべが」
って聞くから、
「死んだんだか、生きでるんだかわからねども、たずねて歩いでる」
と、くどいだごでエ。

「ひば、どこそごの家で、子守りこと下女こどこ置いだで話あるから、そごの家さ案内してける」
と、つで行ってけだけど。したば、そごのわらしたち、
「あら、ちゃ来た」
どて、二人ながら泣いできたけど。そしたば、くわったまなぐがばっとあいだけど。それがら、こういうわけだからって、ヒマもらって、家さもどったごでエ。家に来てこんだ、あばどごよ。
「んがどこも、捨ててけるが」
って、言ったんだど。
「好きだえんにしてけろ」
と、いまかがそう言ったんだど。
「んだごったば、好だえにしてける」
どて、腰さナワかげで、三人してガリガリと山さ引っぱって行ったど。したば、カヤあるべエ。そのカヤさつかまれば、手切れるわけだ。いまかがの血が、カヤの根っこさつくわけだ。このいわれで、カヤ刈れば、赤いわげだ。いまかがの血なんだど。んだがらよ、人苦しませれば、わも苦しませられるだから、悪いごとはさねごど。
あどは、とっぴんばらりのぷう。